

『粘り強く』

元同志社大学学長 原 正 (中45)

大学紛争の折、ただ一人青空講義を続けた。その気骨を買われて学長に請われたという。

私は大正13年7月4日、田方郡(現在は沼津市)内浦重須で農家の次男として生まれ、物心つくころから父母の厳しいしつけの下で育った。というのも、豊かな自然の中を村の悪童達と駆け巡り、自由闊達に過ごしている私を案じてのことらしいが、当時の私にはそんな親の想いに心巡らすこともなく、ただ体力と自然を愛する心を養った子ども時代であった。

菲中時代は昭和12年4月から17年3月の卒業まで、毎日、重須から山越えの道を自転車通勤した。当時は日中戦争たけなわで、校長の山本先生は率先して反射炉の山奥を開墾し、全校生で食料の増産に精を出した。貴重な学生生活を費やしたが、その後の自分にとって大変有意義であったように思う。兎に角、当時菲山中学はノラ中学と呼ぶ人もいたが、それに堪えて5年間を過ごした。当時の同級生 大谷文良・小川近・城所久夫・堤

英二郎・初山育三・山田勲君達とは今も音信がある。部活は陸上部に入ったものの、2年間で戦争のため中止となった。間もなく進学について考える時機となったが、戦中でもあり、先生の勧めもあって迷わず陸軍士官学校に決めた。20年8月31日までの2年数ヶ月在学したが、終戦で任官(職業軍人になること)しなかった。今思えば、僅かな年月の差で任官していたら戦死していた可能性もあり、そうなればこの後の自分は存在しなくなる訳なので、運命の不思議を感じている。



昭和21年春、京都大学理学部化学科へ進学、旧制学部3年、大学院特別研究生5年を含む8年間学んだ。当時は毎晩遅くまで研究し、大学の門が閉まってから塀を乗り越えて帰ったことも度々であった。

しかし、学問以外にも友達とコンサートに行ったり、旅行(無銭に近い)もしたり、楽しく充実していた。その頃、趣味としてヴァイオリンを独学で始め、現在もペーターヴェンのヴァイオリンコンチェルトが疲れたときの癒しの曲となっている。昭和29年、同志社大学工学部に縁があり、新しい環境の中で自由に研究できると考えて就職した。在職中、海外の最先端の現場で、より研究を重ねたいとの情熱にかられ、フルブライトの奨学金を得てアメリカミネソタ大学へ留学。1年の後、指導教授にも引き止められ、さらに研究を進めたかったが、同志社の学生を待たせていたこともあり、後ろ髪を引かれる思いで帰国した。当時は国外へ持ち出せる外貨に制限があり、今

のように簡単に海外へは渡航できない時代であったので、現在、前途有為な青年達が世界各国へ留学している姿を見ると、隔世の感がある。同志社時代の思い出として先ず浮かぶのは、大学紛争の頃のことである。当時は、毎日夜遅くまで学生運動の闘士との団交でつるし上げにあったが、今思えば、心身ともによく頑張れたと思う。また

大学の封鎖中は、私だけ御所の芝生で学生に講義を続けたことを懐かしく思い出す。この時はつくづく頑健な身体と健康な精神を与えてくれた、両親と故郷の自然に感謝したものである。

次なる思い出としては、色々な役職につかせて頂いたことである。立創の地、今出川校地に立つ現在の図書館は、私が図書館長時代に竣工なった労作である。さらに、大学組織の拡充に伴い今出川校地だけでは手狭になったため、府下に求めた田辺の校地は非常に広く、昭和61年の学長就任と同時に開校した。他大学に先駆けての郊外への移転で鳴り物入りの開校ではあったが、多額の借財を抱えて、その返済に苦労した。学生がよりよい生活を送れるように京田辺市当局と色々な交渉をしたことも、今では良い思い出となっている。

この間、勿論、研究への情熱をおろそかにした訳ではなく、独創的な視点での研究を常々学生にも説き、共に研鑽を積んだ結果、日本分析化学会で学会賞を受賞した。役職の激務と研究とを両立させる苦労は並大抵ではなかったが、どちらも自分の使命と思ひ努力した。

私の口から言うのはおこがましいが、同志社大学は、創立者新島襄先生の建学の精神である『一国の良心』を養成する大学として、自由・自治を尊ぶ校風を今も受け継いでいるので、我が故郷の優秀な後輩諸君にも多く入学し、伸び伸びと学んで欲しいと願っている。

その後、平成7年に退任すると同時に脳出血にみまわれ、それ以来、悠々自適、晴耕雨読の生活を

している。現在4年に1回、私のゼミから巣立った卒業生700名くらいが同窓会を開いてくれるので、社会の第一線で働く懐かしい皆に会って話を聞く一時を楽しみ、老い行く頭に快い刺激を受けている。平成14年、それまでの教育・研究に対する業績を認められ、勲2等瑞宝章を受章した。無欲無心で、ただいつも真摯に生きてきただけの私にとって、思いがけないことであったが、愚直な生き方へのご褒美とありがたく拝受した。

最後に、今回私の半生を振り返る機会を頂き、今日の私があるのは、良き師、良き先輩・同輩、良き教え子に恵まれたからだとの感謝の念を新たにしている。

そこでさらに、若き後輩諸君に向け私の経験を通して伝えたいのは次の一言に尽きると気付いた。それは、『粘り強く』という言葉である。これからの長い人生において、順風満帆とはいかない色々な事に直面した時、粘り強く誠実に取り組み、なお、自分の夢の実現に向かって確固たる信念を持ち邁進し続けるところに、良き出会いがあり、必ず道が開けることを信じて進んで行って欲しい。